

ヘルマン・ヘッセの最後の作品

『ガラス玉遊戯』

——「覚醒」への道——

三宅博子

1.

『ガラス玉遊戯』という不思議なタイトルをもった作品は、1943年にチューリッヒのフレッツ＝ヴァスムート社から世に送りだされている。ヘッセの年譜を辿るとき、この作品が1946年のノーベル賞受賞という榮譽⁽¹⁾に連なり、そしてこの作品以降1962年にその生涯を閉じるまでの期間、数々の小品はあっても、もはや長編と呼びうる作品が生まれ出されなかったことを見いだすのである。この事実から、一般にもその文学性を高く評価された『ガラス玉遊戯』がヘッセの創作の集大成であり、その詩的営為の帰着点を示している、と考えるも大きく的外したことはないだろう。この判断を裏付けるもう一つの根拠は、その構想と執筆に費やされた長い年月である。その開始時期については、前作『東方巡礼』(Die Morgenlandfahrt)⁽²⁾の完成した1931年まで遡るともされているが⁽³⁾、その構想を示唆するヘッセ自身の言葉は、1932年頃の書簡から散見される⁽⁴⁾。そして1934年『新展望』(Die Neue Rundschau)誌上に初めてその一部が掲載され、以後『コロナ』(Corona)誌も加えて、ほとんどの章が両誌に発表され、1943年5月ようやく執筆は終了する⁽⁵⁾。完成までには10年を越える時間を要したのである。

もちろん創作の進捗を決定するのは、その内容に関わるものばかりとは限らない。すでに挙げた年号からも分かるように、『ガラス玉遊戯』の書かれた時

期は、ナチの政権樹立から第二次大戦という破局に向かう時代とそのまま重なっている。中立国スイスに居を定めていたヘッセにとっても、出版や講演活動のほとんどを祖国ドイツに負っている以上、ナチ政権の存在は創作の根幹を揺るがす脅威であった。またそれは彼の人間関係にも大きな影を落としたのである。ドイツにいる家族、友人たちは、ある者はナチの煽動に身を委ね、ある者は生活基盤だけでなく生命そのものまでも脅かされていた。彼らに対する憂慮は詩人を有形無形の支援活動へと駆り立てずにはいられなかったのである。加えて、ヘッセの健康はもう長らく治療と療養によって辛うじて維持されているというような状態だった。1930年以降、眼病の悪化と失明の恐怖はしばしば執筆を中断させる原因でもあった。

しかし個人的な事情にはこれ以上立ち入らないことにしたい。作者を取り巻く内外の情勢が作品にその刻印を残すことは十分承知しているのだが、それにとらわれて作品を読み解くことは『ガラス玉遊戯』の序章の、次の言葉が戒められているように思われる。

今日の人間であるわれわれの興味を惹くのは、主人公の病理でも、家族史でも、性生活や消化、睡眠でもない。彼の精神的な前史や好んだ研究、愛読書による教育等でもさえもわれわれには格別重要ではないのだ⁶⁾。

文中の主人公を作者と置き換えて考えるならば、関心を向けるべき対象は、詩人の日常的な瑣末事でも、彼に影響した歴史的・精神的事件の具体的内容ではない。その創作であり、作品そのものなのである。そして時代あるいは個人という軛から解き放たれてなお残るなにかを現前化しえたとき、読むものは作品が詩的営為として時空を越えて飛翔するのを目にするのかもしれない。

2.

『ガラス玉遊戯』には「遊戯名人ヨーゼフ・クネヒトの伝記の試みとクネヒ

トの遺稿」という副題が付いている。さらにテキストは、クネヒトの生涯を記述するに先立って、かなり長い導入部、序章をもっている。「ガラス玉遊戯—その歴史への一般理解のための概説」と題された序章は、しかしながら実際には読者にとって必ずしも理解しやすいものとは言い難い。まず、モットーとして掲げられているラテン語の文章は、クネヒトの手になるという翻訳が添えられているものの、その内容は謎かけのようである。つまり、存在しないものであっても、敬虔にして良心的な人が存在するものとして扱うことよって存在に、誕生の可能性に近づきうるもの、そうしたものを言葉で表現することの困難さと切実な必要性を訴えているのである。もとよりこの作品を手取る者は、クネヒトなる人物も彼の伝記なるものもフィクションであることを知っている。そしてこの序章を読み進めば、20世紀を彷彿とさせる危機の時代を過ぎること数百年という時代に生きた主人公を、そこからさらに相当時間を経た時点から振り返る設定となっており、一種の未来小説であることが判然としてくるのである。そうなるこのモットーは、架空の世界と知りつつもその内部に入り込み、同化しようとする読みに対して架空の人物自身が水を差しているようにも思われる。そうすることによって、何らかの覚醒が促されているのではないのだろうか。

モットーに続いて、ガラス玉遊戯の発達史が述べられている。すなわち、文化さえも消費財に貶めてしまい、精神文化が極度に荒廃した「文化欄時代」(Das feuillettonische Zeitalter)⁽⁷⁾を生き抜き、精神を受け継いでいった少数の人々が教育の改革を手掛かりにし、ついにはカスターリエンという精神の王国を築いていったこと、かつては数学や音楽、言語学等の狭い研究分野で別々に主として知的なゲーム、娯楽として行われていたガラス玉遊戯がこの精神的教育組織に取り入れられ、洗練されていったこと、そして、あらゆる学問と芸術を総合するこの遊戯がカスターリエンの中心に据えられていった経緯を説明している。しかしガラス玉遊戯が具体的にどのようなものなのかという問いは、「われわれからガラス玉遊戯の完全な歴史と理論を期待しないでほしい。たとえわれわれよりも熟達した者でもそれは不可能であろう。」⁽⁸⁾と、拒絶されてしまうので

ある。「この遊戯のなかの遊戯は、ある時は学問、ある時は芸術というようにその支配力が交替する下で、遊戯者が意義深い記号に諸価値を表現し、互いに関連付けうる一種の普遍言語へと形成されていった」⁹⁾という抽象的な説明で満足しなければならない。

さて、クネヒトの伝記は12の章で構成されている。そしてその後に「ヨーゼフ・クネヒトの遺稿」として彼の生徒時代の詩と研究時代に所定の手続きとして書かれた三つの履歴書が続いている。これら「遺稿」とクネヒトの伝記との作品構成上、及び内容的な関連についての考察はまた別の機会に譲るとして、ここではすでに概観した序章と伝記本文のみを対象を限定しておくことにする。

クネヒトの物語は、ガラス玉遊戯が密接な関係をもち、主人公も深い関心を寄せる音楽理論とその考察、数は多くないものの、彼の人生を彩る人物たちのエピソードが重層的に絡まり、壮大な織物をなしている。そこでまずその縦糸たるクネヒトの人生の歩みを抽出していく作業から始めるのが妥当だろう。

第一章は「召命」は、まだ十代初め、ラテン語学校の生徒であったクネヒトが音楽教師の推薦を受け、カスターリエンのエリート校エッシュホルツへと迎え入れられるところから始まる。そしてそこでの基礎教育を終える頃にはすでに、自らがガラス玉遊戯に向かっていることを予感するクネヒトの姿がある。第二章の題にもなっているヴァルトツェルはガラス玉遊戯の中心地であり、この遊戯の養成を専門にする上級学校がある。ここに進学したクネヒトではあるが、むしろその求心力に抗するかのようには音楽研究に没頭していく。そんな彼にとって画期的な事件となるのは、この精神の国の教育施設に外の世界の客人として籍を置くプリニオ・デジニョーリとの出会いであり、彼とクネヒトの間で展開していったカスターリエンの理念と世俗世界を巡る論争であった。このことについては後で検討するとして、そのときクネヒトに課せられた立場、すなわちカスターリエンを代表し、擁護する立場への省察こそが続く第三章「研究時代」の出発点である。精神の国の真髄たるガラス玉遊戯に対する自分のあり方を胸に問いつつ、クネヒトはあえて迂回するように、多方面にその知的好

奇心を拡大させていく。やがて竹林に住まう中国研究者であり、その思想の実践する人のもとで学んだ後、彼のガラス玉遊戯への回帰は、ある確信をもって果たされるのである。そんな彼を待っていたのは、当時の遊戯名人トーマスの召喚とカスターリエンの教団への参入である。もはや一介の研究者ではなくなった彼は教団本部の命令により、外の世界であるマリアフェルス修道院へ派遣されていくのである。

第四章「二つの教団」、第五章「使命」はクネヒトのマリアフェルス修道院での滞在を記述している。彼の派遣の意義を画するのは、二年程過ぎた時点でなされたカスターリエン本部への帰還命令である。派遣の当初、クネヒトは修道院内でのガラス玉遊戯の入門授業の担当という名目上の役割と共に、付随的な形ではあるが、修道院の様子を報告するよう指示されていた。そしてこの帰還の際、彼の使命がはっきりと説明されるのである。すなわち、ローマ法王庁との外交関係を画策しているカスターリエンの指針に沿って、ヴァチカンに対して影響力のある人物、マリアフェルス修道院の老神父ヤコブスへの働きかけをせよ、とのことである。歴史研究に対して真摯な態度を貫くこの神父との交流は、すでにクネヒトの滞りの早い時期に始まっており、負担にもならないが、刺激も得られない名目上の授業に代わって彼の心を惹きつけていたのである。したがって、再び修道院に戻ったクネヒトにとっては名目上も、実質的にも神父その人が最大関心事であり、二人はカスターリエンの存在を歴史研究の対象とし、互いに教え、教えられる立場を交換しつつ、その親交を深めていったのである。しかしこの知的交流はやや唐突に中断する。第六章「遊戯名人」は、マリアフェルスでの使命を果たしたクネヒトのカスターリエンへの、ガラス玉遊戯への劇的な帰還を描いている。まだ何の予感もなく、クネヒトはヴァルトツェルで開催される遊戯名人の年次祭典に参加するため、修道院をあとにする。期待に反して、遊戯の聖地は、トーマス名人の死により、急遽代理人の手で執行された祭典が惨憺たる結果に終わり、重苦しい雰囲気包まれてしまう。そしてこの沈滞を打破するのが名人の後継者としてのクネヒトの指名なのである。いや、カスターリエン全体の名誉までも失墜させてしまった祭典の失

敗は、むしろ異例の若さで最高位に就いた人の、高い知性と人格によってヴァルトツェルの統治に成功していく様を一層輝かしいものとするため、意図的に置かれた暗転なのだろう。

第七章「職務にて」、ここには階級組織の頂点にあって、かつての同僚であり、また友人であった人々を明晰な判断力によって配置し、制御していく遊戯名人クネヒトがいる。しかも彼は、名人たる者の最も重要な責務であり、自分が初め指揮することになる次の遊戯の祭典をもすでに視野に入れて日々を送っていくのである。周到に準備され、前回の不幸な結末を払拭して余りあるほど素晴らしい祭典で始まる第八章「二つの極」ではあるが、人々の感動や称賛とは裏腹に、クネヒトの心には、この遊戯の、そしてこの遊戯を精髓とするカスターリエン自体の無常性が深く刻み込まれていった。任務を忠実に果たし、ガラス玉遊戯に生きる人々の世界を非難の余地のないほど支配する人の内部で、かつて研究時代の終わりにすでに兆していたある覚醒が、ヤコブス神父との歴史研究を通じて深化し、いまカスターリエンそのものと拮抗しうる確信となつて、彼に決断を迫っていた。カスターリエンの外にある世界へのクネヒトの関心、この理想の国の垣を踏み越えていこうとする意志は、昔の学友プリニオとの再会を機に実行段階に移つたのである。第九章「対話」、第十章「準備」では、友人を介して外の世界を知り、そこで教師として生きうる可能性を信じるようようになって、クネヒトはプリニオの息子チートーの家庭教師を引き受ける計画を立てるのである。しかし彼は密かにカスターリエンを脱出することを選ばず、教団本部に遊戯名人の任を解き、外の世界へ教師として派遣するよう請願を提出する。第十一章「回状」にはその全文と本部からの彼の願いを拒絶する返書が載せられている。クネヒトの請願書はその大部分を、彼の決意の根拠となつたカスターリエン存亡の危機意識を論述することに当てている。彼の警告に対して教団は否定的な判断しか下さない。それはクネヒト自身にとつて親しい思考回路から導き出された結論であつて、何ら意外なものではなかつた。もはや妥協点を見いだせない二つの主張は、第十二章「伝説」においては、遊戯名人の印章を返すため本部を訪れたクネヒトと本部の長官との間の対

話の形で反復される。和解ではなく、互いの立場を了承した上での決別であった。その後プリニオの家へ、そしてチートーを追って新しい生活の場となるはずの湖畔の山荘へと、クネヒトは慌ただしく旅を続けていく。山荘での朝、チートーの信頼を得ようと、共に冷たい湖水を泳ぎだしたものの、かつての遊戯名人は冷水に呆気なく凌駕され、溶けているようにその姿を消してしまう。後には途方に暮れ、ただならぬ予感に怯える少年だけが湖畔に取り残されているのである。

3.

さて、クネヒトの物語の初めに立ち返って、素朴な問いを手掛かりに解釈を試みることにしたい。すなわち、カスターリエンとはいかなるところか、ガラス玉遊戯に凝縮されるその理念とはどんなものなのか。

ガラス玉遊戯の成立史を記述する序章で確認したように、精神陶冶の欠如とそれが人々に与えた影響の深刻さが、長い年月を要したものの、ようやく了解され、「国家と民族における精神の育成、特に学校制度が精神的な人々によってますます独占されることとなった。」⁽¹⁰⁾そして「教育局によって好意的に促進され」⁽¹¹⁾たガラス玉遊戯との同化融合を経て、クネヒトの登場する頃のカスターリエンは「山の多いわれわれの国のある最も静かな明るい地方」⁽¹²⁾に自立した国家組織のように厳然と存在しているのである。しかし強固にして厳密なるその組織を強調する言葉に接しても、カスターリエンの具体的な把握はどこか虚しくすり抜けていく。「この記録の著者や読者であるわれわれの生きているこの世界」⁽¹³⁾として、読者をもその圏内に引き入れるレトリックはすべてを自明のこつのように語るが、しかし読者はもちろん、主人公クネヒトと共に初めてそこに足を踏み入れ、そのヒエラルヒーを登っていくのである。

その出発点においてはラテン語学校生、つまり一般の、いわゆる世俗世界の住人クネヒト少年が、彼の生涯の守護神とも言うべき音楽名人に出会う。それは本来、クネヒトがカスターリエンのエリート校に入るための試験であり、現

実的な結果をもつ出来事であるはずなのである。しかし老人に導かれる音楽に、「自分の前に成立していく楽曲の背後に、精神を、法則と自由を、奉仕と支配の、人を幸福にする調和を感じ」⁽¹⁴⁾た彼はこの経験を、「この召命をほとんど自分の内部の出来事としてのみ体験し」⁽¹⁵⁾ている。そしてこの内的な経験は彼を周囲の人々から切り離していく。エリート校への入学資格者リストを名誉の証明とする教師たちの判断、あるいはそれを羨望と揶揄の混じり合った感情で見る生徒たちの態度に対して、「別離と個別化」⁽¹⁶⁾が彼の内部で完結していくのである。つまり、音楽を通してクネヒトに感受されたカスターリエンの理念は内面化し始めたのである。しかもこの内面化は、同時にそして常に外部の世界とその価値観との対置、あるいは隔絶と呼応している。

外部の世界の価値観とカスターリエンの理念がはっきりと対決という形をとり、その故にクネヒト自身に徹底した内面化が迫られたのは、ヴァルトツェル校の聴講生プリニオとの論争である。彼は「世俗的な見解と規範をカスターリエンのそれと対立させ、前者をより良く、より正しく、より自然で、人間的であるものと称する」⁽¹⁷⁾人物として登場する。初めは学友同志の個人的な論争が、音楽名人によって見守られ、公式の承認を得るようになると、クネヒトには「カスターリエンをその批判者に対して守り、両見解の討議を最高の水準にもたらず」⁽¹⁸⁾べき任務が課せられる。プリニオの言葉のなかに感じていた「自分の地平の拡大、ある認識、啓蒙、おそらくはまた誘惑と危険、とにかく耐え抜く価値のあるもの」⁽¹⁹⁾への予感、クネヒトに「自分が弁護する立場にあるものを、ますますはっきりと、ますます切実に、自分自身のこととして意識」⁽²⁰⁾するよう促すのである。しかし彼は、自分の世界の確固たる実在性に支えられ、しかも優れた弁論を展開するプリニオの前にして、「二つの世界は何故、見たところ調和的にも、兄弟としても並ぼうとせず、関連しないまま生きてきたのか。この世界を両方とも自分の中に抱き、一致できなかったのか」⁽²¹⁾とも自問せざるを得ないのである。とはいえ、在籍期間の終了に伴い、現実の世界に戻るプリニオの目は、論争を通じて「模範的なカスターリエン人に成長して」⁽²²⁾いったクネヒトの変化を認めているのである。

クネヒトがより高次のレベルでカスターリエンと対峙する価値観を見いだすのは、ヤコブス神父においてである。彼は、実生活を代表するプリニオとは異なり、時の流れを越えて生命を保ちつづけている厳然たる精神世界、カトリック教会⁽²³⁾に身を置き、博識にして批判精神に富んだ歴史研究者として登場する。カスターリエンに対して必ずしも好意的ではない神父とクネヒトは、互いの探究心によって惹かれ合うのである。そしてクネヒトはカスターリエンの制度や組織に対する神父の理解を得るべき任務を負っているのである。

かつて教団の成立とそれに続いたことすべてを可能にし、促進した世界史的な諸情勢が彼自身にとって直観性と秩序に乏しい、単に図式的な、色褪せた形でしか想像できないということが明らかになった。(……) 彼がカスターリエンの教団の歴史を説明しようとする時、ヤコブスは多くの点で、この歴史を正しく見、体験し、その根源を一般の世界史、諸国家史のなかに見いだすよう助けてくれた⁽²⁴⁾。

カスターリエンの理念がおそらくは最も純粋な形で把握されたであろう、その成立時をクネヒトは「体験」したのである。そして彼はその理念を表象するガラス玉遊戯の最高執行者、遊戯名人となるのである。

4.

クネヒトの歩みはカスターリエンの理念の内面化の過程であった。しかもそれは、外界との対峙によって促進されていったのであるが、最後には遊戯名人の地位を捨て、カスターリエンをも捨てていくのである。しかし逸脱したはず彼の存在もガラス玉遊戯の発展の一段階として組み込まれていることを忘れてはならない。序章は、クネヒトの伝記が彼個人に対する関心に基づいて書かれたのではないことを明言している。「ガラス玉遊戯の展開に目を向けると、展開の各段階、各々の創立、各々の変化、各々の本質的な転機は、(……) 変化

を導入し、改良と完全化の手段になった人物においてその明確な相貌を示すのだと言うことが否応なく分かるのである。』⁽²⁵⁾このことを確認した上で、カスターリエンとはいかなるところか、その理念とはどんなものかという問いを考えなければならぬだろう。

鍵は主人公の名にある。「君はクネヒト (Knecht=下僕) という名をもっている。それ故に自由という言葉が君にとってそんなにも魅惑をもつのだろう。』⁽²⁶⁾外の世界の「自由」について問うエツシエホルツの生徒クネヒトに、こう前置きして音楽名人は答えている。外の世界の自由は、その見せかけの背後に、財産、野心、世間の評判といった拘束を隠している。「他方、未来の教団員に関してはあらゆる点で逆なのだ。(……) この階級組織ではいつも上位者が選ぶ地位に置かれ、上位者が選ぶ役割に規定される。(……) そうすればあの恐ろしい隷属状態を意味する職業の自由からは一生免れるのだ。』⁽²⁷⁾この言説では普通の意味での対立概念「自由／隷属」が逆転している。一般的な「自由」=隷属であり、この隷属からの解放として、新たな「自由」を指定する。「君は助手よりもボスに向いている、君の名にもかかわらず。』⁽²⁸⁾プリニオのこの言葉にも逆転を促す語彙「にもかかわらず」(zum Trotz)が含まれている。思えば、カスターリエのユートピア的な側面を表す叙述にはほとんど否定詞ないしは否定的な語彙が含まれている。「家族のない、多くの伝説的な気晴らしのない生活、(……) 苦難も飢えもない生活」⁽²⁹⁾あるいは「女性に関して、カスターリエンの学生は様々な誘惑と危険を伴った結婚も知らないし、性的禁欲を強制したり、金銭でどうにかなる女たちに多少は頼らざるをえないような過去の時代のポーズも知らない。』⁽³⁰⁾というような卑近なレベルから、その本質を射抜く「歴史のない国」⁽³¹⁾という表現に至るまで否定語なしには成り立たないのである。そして下僕という名をもつ人は「名誉心や苦勞によらず、また努力もわざとらしい順応もなく、ほとんどその意志に反して」⁽³²⁾頂点に立ったのである。

否定は静止状態にあるものを相対化させ、逆転させ、活性化させる作用を孕んでいる。カスターリエンの理念がこの作用を原動力とするならば、その理念を内面化するクネヒトにおいてこの逆転の運動がいつかは反転し、否定によ

って構築された世界そのものに向かわざるをえない。ついにはカスターリエンの世界からの逸脱に至るその反転は、彼が「覚醒」と呼んだ経験、すなわちカスターリエンの自由を満喫する研究時代に出会ったひとりの中国研究者との対峙に始まる。竹林に住まい、精神の国にあってなお厳密にその思想世界に隠棲する人は自分が教えた易経をガラス玉遊戯に組み入れようとするクネヒトにこう言う。「きれいな小さい竹林を世界のなかへ入れること、それはできる。しかし世界を竹林に植えつけることに庭師が成功するかどうか、私には疑わしい。」⁽³³⁾ ここには非在を究極にまで押し進めた世界がある。逆転の運動はその極致で停止し、時間さえも凍りついている。この世界に身を置きつつ感じた「覚醒」はすでに述べたように、歴史研究を通して、カスターリエンが歴史のなかに始まりと終焉をもつ有限の存在であるという認識へと反転していくのである。

「カスターリエンとガラス玉遊戯が（……）すべてのものと同様にいつかは消滅しなければならないことを人は考えたがらない。しかしこのことをこそ考えなければならないのだ。」⁽³⁴⁾ 遊戯名人のこの嘆息は、もはや彼がカスターリエンの内部の人ではないことを示唆している。世界を構成するものが世界そのものについて言及するとき、彼はもう世界を概観しうる場に、つまり外部にいるのである。だからこそクネヒトはカスターリエンの法規に拘束されることなく⁽³⁵⁾、遊戯を終了し、この世界を放擲できるのである。だが遊戯を終えたクネヒトのいる外部とはいったいどこなのだろうか。

クネヒトはプリニオの世界へ、そしてもちろんエッシュホルツ以前には彼自身もいたはずの世界に帰ってきたのである。「彼の道は円環を、あるいは楕円、螺旋を進んでいた。」⁽³⁶⁾ しかしクネヒトは高原の希薄な空気に疲弊し、すべてが新たに始まる朝、消滅してしまう。彼は予感するだけであって、終わりが始まりにつながり、永遠の円環が完成する瞬間を見ることはできないのである。なぜならクネヒトの生涯は、その恣意をも奉仕と服従に、自由への指向もなにものかへの結びつきに転じるより大きな螺旋の運動の、つまりガラス玉遊戯の一部にすぎないのだから。ただ、この予感は、「中心に立つものの周囲の空間を

回転することだけが存在する」⁽³⁷⁾という認識は決して虚無には陥らない。「徳はそれでもなお存続し、その価値と魔力を維持していたのだ。徳は、否と言うことのうちにではなく、諾と言うことのうちに存続したのだ。」⁽³⁸⁾この高貴な姿勢は、しかしながら悲壮感とは無縁である。むしろ名状し難い明るさ、希望の光すら感じさせる。そしてヘッセという作家を知るものであれば、それがフモール (Humor) と呼ばれたものであると気づくはずである。あらゆる理想が破壊しつくされた精神の荒野に、ハリー・ハラールが、ナルチスが見た救済の光は、いま『ガラス玉遊戯』において最高の比喩を獲得したのではないだろうか。

注

『ガラス玉遊戯』からの引用はすべて Hermann Hesse, *Gesammelte Werke in zwölf Bänden*. Frankfurt a. M. Suhrkamp. 1970 Bd. 9. による。引用箇所は頁数のみ記す。

- (1) しかしヘッセはこの受賞を、推薦者であるトーマス・マンの友情と友人たちの喜ぶ姿以上には評価していない。むしろこれを機に一層増えてくる手紙や人々の要求に忙殺され、憂鬱な気分を深めている。その間の彼の思いは、当時の書簡にかなり辛辣な表現で綴られている。vgl. Hermann Hesse: *Gesammelte Briefe*. Dritter Band (1936–1948) Frankfurt a. M. Suhrkamp. 1982. S. 385 ff.
- (2) 『ガラス玉遊戯』の序章には「東方巡礼者に」という献辞が掲げられており、文中でも彼らの存在をガラス玉遊戯とカスターリエンの前史として言及している。この点から、『東方巡礼』を『ガラス玉遊戯』の「一種の原形、序曲」とする評価が一般である。vgl. Heinz Stolte: *Hermann Hesse Weltschau und Lebensliebe*. Hamburg Hansa-Verlag. 1971. S. 229.
- (3) Ralph Freedman: *Hermann Hesse Autor der Krisis. Eine Biographie*. (Zweiter Auflage) Frankfurt a. M. Suhrkamp 1982. S. 431.
- (4) 1932年4月3日付 Helene Welti宛のものが最も早いと考えられる。Hermann Hesse: *Gesammelte Briefe*. Zweiter Band (1922–1935) Frankfurt a. M. Suhrkamp. 1979. S. 332.
- (5) *Materialien zu Hermann Hesses >Das Glasperlenspiel< Erster Band*. (hrg. v. Volker Michels) Suhrkamp 1981. S. 37 ff.
- (6) S. 10.
- (7) S. 15.
- (8) S. 11.
- (9) S. 39.

- (10) S. 34.
 (11) S. 42.
 (12) S. 62.
 (13) S. 47.
 (14) S. 54. ガラス玉遊戯の主要なテーマとして説明されていた法則と自由、奉仕と支配という対立概念とその調和が音楽を通じて少年クネヒトに感受されている。vgl. S. 40.
 (15) S. 57.
 (16) S. 59.
 (17) S. 96.
 (18) S. 101.
 (19) S. 96.
 (20) S. 102.
 (21) S. 104.
 (22) S. 111.
 (23) カスターリエンは、その階級組織においてはカトリック教会と多くの共通点がある。というよりもヤコブスの言葉を借りるなら、「キリスト教の聖省の模倣(……)、しかもカスターリエンの教団は、宗教も神も教会も基礎にもたないので、結局のところ冒瀆的な模倣」ということになる。vgl. S. 174.
 (24) S. 209.
 (25) S. 9.
 (26) S. 74.
 (27) S. 75 f.
 (28) S. 113.
 (29) S. 103.
 (30) S. 116.
 (31) S. 441.
 (32) S. 313.
 (33) S. 139.
 (34) S. 287.
 (35) 教団本部の長官アレクサンダーはクネヒトの辞任の求めが教団の法規に照らして、何ら違反に当たらないことを確認せざるを得ないのである。S. 429.
 (36) S. 417.
 (37) S. 418.
 (38) *ibid.*